

第五中学校区(一)

## 鯖石白米城の話

八石山の城主、毛利上総介浄広は南城経光の孫で驍勇仁慈の人であつたので人々は鯖石君と呼んでいた。

はじめ北条の城主毛利丹後守長国は上杉謙信で枇杷島、安田とともに柏崎以南の鯖石、高柳、松之山から小国、千田に至る諸道をつちり固め、その勢を振っていた。

ところが鯖石君の名がようやく高まり、人々はその勇に服し、その仁をあがめるようになったので、丹後守はその勢いが自分をしのぐのではないか、自分を追い落すのではないかと恐れ、不安に思うようになった。

丹後守は朝夕城楼にのぼって八石城を眺めては、鯖石君を滅亡させねばならぬと胸中、策をめぐらしはじめた。八石は北条からはいくらも離れていないが谷が深くて天険、城は雲に棲せんばかりにきりたっている。これを攻め落すには力づくではできない。

峻険の地にある城だから井戸に水が少ない筈だ。用心がめの貯水がつきる時に、火攻めにすれば一挙に落すことが出来る。そこで将兵に命じて、山にとりでを築きたしては之にせまり、問道、羊角の道をつかかつては八石にとりつき、伏兵をおいて城の様子をうかがわせていた。

八石方では物見の兵が敵の様子を見てとつて城内急を告げるにいたつた。上総介は敵方の様子を聞いて、丹後はわが方の水がつきるので待って火をかけて攻めようとしていた。

ここで城中水が多いことを示して彼の計を水泡に期せしめようと考へ、数百の汲桶に白米をもりこませ、兵たちにこれを水をまくように盛に柵外の地にふりまかせた。

ちょうど、その時は暑さ烈しい時で、丹後守方の伏兵には城地内しきりに水まきをしているように見える。この知らせを受けた丹後守は城が險で水が多くてはとて、これを攻めることができなと遂に兵を引き、和を請うことにした。

使者を送つて、もともと同族であり、隣り合つておりながら朝夕会うこともできないでいることから巷間両家の不和を流言していることは不安をかもし出すだけだから、ここに両家の和親を濃くして民百姓共を安心させたいから未熟者ではあるが、わが娘を鯖石君の妻として迎えていただけないかと辞をひくくして申し入れた。

鯖石君も和は望むところ、また重臣たちも北条殿の息女を迎えることは人質にも等しく異議のあるう筈がなく、吉日をえらんで迎え入れることにした。

——このあと鯖石君の名声はますます高く、謙信の覚えもめでたかつたが、謙信没後、丹後守は景虎方となり、上総介は景勝方となり、ついに丹後守にあざむかれて死すという悲話につながる——一説には、殿様が馬に白米をかけた。遠くから見ると馬に水をかけて行水している様に見えたので、北条方は兵をひいた。

今この所(馬に白米をかけた所)を真平(まひら)と言っているが昔は米平(まひら)とも、馬平(まひら)とも書いたという事である。



## 城の和尚

八石城主毛利大方之介が討たれ落城してからは、そこを居城とするものはなかったらしい。

明治初年のころか荒れ果てた山上に、どこの何某ともわからぬ坊主が、小屋を建てて住んでいた。そして麓の村々を托鉢して暮らしていたが、野菜類は山の中腹まで来て、開墾した畑に、百姓たちが大根、いもや菜類を作っておくのを頂戴していた。

奇行というか、野萱の穂を折って、そこへ昔のお金、鳥目をさしこんで、無断で野菜類を頂戴したお代としていたそうだ。

ある大雪の冬、麓の人たちが、あの坊さんはどうしたろうかと四人して登山して見たら、それらしい地点も白雪がいがいとして見る限りは白一色の銀世界、殊に山は雪が深く寒さも別して感じる。

小屋もつぶれ、僧も死んだらうと山頂で話し合つて、ふと見ると一とところ雪の渦を巻いたようにへこんだところから、かすかに糸のような煙が立ち上っているのが見えた。

みんなは、大急ぎでそこを掘り起してゆくと、どうしたことか、凍死もせず、僅かに薪がくすぶっている小屋に、座禅を組んでいる山の和尚の姿を見つけ、びっくりした。

和尚は静かに座禅の手をほぐし、

「みんなよく来てくれた。まあこちらへ来て休んでくれ」

そう言つて、手ずから薪をくべ足し、どう調理したか、みんなにお屋をご馳走してくれたとのことである。

名僧か俗僧か、その最後を知るものはない。

## 天狗の投げ石

八石山の頂上に、天狗の投げ石というものがあつた。鞍馬（くらま）山（京都市北郊）の天狗が投げたものが落ちたのだという。三かかえもある大けやきの三米程上った所に、二かかえもある石がはさまれている。

## 八石山登山禁止の日

四月十八日は八石城が落城した日にあたるので、この日は八石山に登山することは、今でも禁止されている。

無理に登山すると必ずといつていいほど、さわりがあると言ひ伝えられている。

## ババ石の由来

八石山頂に、ババ石がある。

久木太の彌三郎婆が、家の破風窓から飛び出してからは、この石に腰を下ろして、麓を打ち眺め、葬式の列があると、飛び立って行つては、死人をさらつて喰つたという。

## 八石の宝探し

八石山上の乱穴には金無垢の鶏の置物がかくされていると伝わっている。

その場所は目印として、キハダの木が植えてあったが、キハダの木の皮が薬用として、はぎ取られたため枯れてしまい、今は小さいのが立っているそうだ。

何遍かこの穴を掘り返してみたが、深く掘るとガスのせいか具合が悪くなって、下山する仕末であった。

そのうち腕に覚えのある鉄砲打ち仲間でかなり掘り下げたら、一枚石となっていて、どうすることもならずあきらめたということである。

ところがこの宝物の話は全国に知れ渡っており、いまだにこの乱穴を探し、金無垢の鶏を掘り当てようというものが後をたたないそうである。

一説には掘り当てた一枚石をはねたら、木炭が化石したようになっていたが、宝物はなかった。一枚石には字が刻まれてあったが雪のためか割れてしまった。

## 大野田の柵型城趾

八石山上の城は築城研究家によると、非常に地の理を得た、土地

を掌握しうるによいよう研究してあるとのこと、

山上の城のほか山腹や柵の方にも城と関連して遺跡がある。

大野田のあるところには、柵型城跡(とりでか)あり、冬分は山下で暮したのか、中沢邸の前あたりをお屋敷と通称する。

また佐之久から城へ登る道の平坦の一箇所の地名は、甘ん座敷といて、往時、登城の人々に甘酒をふるまった所と伝えられている、またその近くには、戦勝を祈念したところか薬師堂と称する土地もある。

## 弁慶の投げ石

弁慶が十三才の時、八石山に登って力だめしに石を投げたという伝説がある。

投げた処は八石山でそこには足をのせて踏みつけた足跡が石に残っているという。八石山の火の見やぐらという所にある。

投げた石は約三、四十貫。この石は飛んで上条郷の廻り谷に落ち今でもあるといい、その石には弁慶の指のあとが見えるという。

## 八石山の豆の木

昔、善根村に六十才に余る老婆が住んでいた。家が貧乏であったが、心あたたかい老婆であった。ある時、いり豆を山畑に植えたところが、やがて芽を出し秋になって豆が大木になり、枝もたわわに

実がなつた。老婆は大いに喜んで、楨形山の神より楨を借りてはかつたら八石あつたという。それからこの山を八石山と呼び、楨を納めた山を楨形山と名づけたという。

## 善根の笠薬師

久之木の鱗石川べりの丘の杉森の中に、この薬師さんがあつた。土地改良のため現在は飛岡の用水池の上の山に移転した。

この薬師さんは久之木にあつて、下は南条方面、対岸は加納方面善根はもちろん、遠く与板宮平方面からも、お詣りがあつたとのことである。

笠薬師といつても 実は梅毒（かさ）に關係のある病気をなおすご利益あらたかな薬師様だつた。

今は山の雑木林に、忘れられようとしているが、それでも「できるもの」の神様だとして、土地の人々の信仰がある。

笠薬師に「できるもの」をなおして下されば、豆一（ひと）から一ひと鍋一煎つて供えますと、願つたもので、ひところ豆で大変だつたと古老は言っている。

この薬師を拜むときは、胃の病気であろうが、皮膚病であろうが「私がかさ（梅毒）の病気でこまっています どうか おなおしください」  
と 言つて拜まなければ ききめがないので それで「かさやくし」というと。

## 一本杉の京参り

久之木と南条の境にもとこが街道だつたところにかなり広い平坦地がある。―これは後年部落の人が牛の品評会などのため開墾した箇所もある―

この杉は一本杉京参りの伝説があるがあまり知られていない。というのは茨目のかたがり松が夢枕に立つて上方参りを知らせて、その後一年ほど、木の勢が弱つたかに見えた、という話しの方が多くを占めていたせいだろうか。

土地の人はこの杉を千本杉と呼んでいる。天然記念物に準じた樹相のこの杉は、周囲と幹丈とも中村の樹齡千年の大杉には及ばないとしても、千本杉の名の如く地上、3m位のところから一抱えもある枝が四方八方に伸び出て、一株で優に一山をおうの観がある。

もとは檜（かし）の木が一本亭々とそばに生えていたが、牛をつないだりして枯らしてしまつた。

県道二和線が全通するとこの真下近く通ることとなると一つの景観を呈することになる。

昔、街道であつたときは、大樹の下で雨も落ちず、乞食の群れがいつもごろついでいて、気味悪かつたとのこと。

京参りの話はいつのころの話になるのか、乞食連のつくり話でもあろうか。

一説には、この一本杉は横山の五本松と山室のけやきと京都見物に行き 宿銭がたらないので借錢して帰つて来たという。

後日、宿の主人が「わらじを目じるしにしておくから たずねて来い」という言葉信じて、善根に来ると一本杉にわらじをかけてあり、多分の金銭が枝にかけてあったという。

## さんやさん

さんやさんは字名久之木と豆田の境に安置してあった。この仏さんに願をかければ、どんな悪魔にとりつかれようとも必ず追い払う、ききめあらたかな仏様である。

さんやさん(勢至菩薩)の建立は、寛政九巳年三月吉日、施主村中となっているが、現在の場所が道路のそばでほこりをかぶったり、子どもたちがいたずらするので、もったいないからと別のところへ移転したところ、二年も続けて悪い病気が流行した。そこで、これはきつと、さんやさんのたたりだろうと、もとのところに安置したというので、土地改良のときもその点を考慮した。

このさんやさんの台石に、一首の歌が刻まれているのだが、飛岡の矢川某なる老人が上方見物をしたとき、ある四国の泊りでの話に、越後の鯖石は久之木部落に、さんやさんがあるが、それにはとても良い歌が刻まれている。その歌はこうだとすらすらと暗誦していたので、びっくりした矢川老人は旅から帰って早速調べて見たら、四国の宿で聞いたとおりの歌

久を抜きて心善根に傾けば

悪魔入れじと勢至たておく

と刻まれている。その後、お堂を建て、道行く人が礼拝供花し、

信仰している。

## 大日堂由来

久之木の大日如来さんは、本尊はおおずしに入った小形のもと、わきの立像は長身、

昔から大変ご利益あらたかであるが、大東亜戦争の時この部落出身の某が、シンガポールからマレーシア戦線に従軍中、ジャングルに迷い込み、どうにもならず、死さえ覚悟した夜更け、自分が心に念じた故郷の大日如来のご利益か、眼前に螢火ほどの灯りがふわりふわりと動き、ちょうど行くべき方向を知らせているようなので、その光りのままに従って、迷路のジャングルをくぐり、くぐり歩くこと数時間、いつしか原隊の方向が確認されるところで夜が明けたということである。

## 八まん田の無銘碑

久之木の八まん田というところに、一見何ともわからぬ角張った大石が道端にあり、そばに小さい地藏様が置かれてあるので、何か由緒があるかなと思わせる。

これは八石城主毛利大万之介公が、北条丹後守に、だまし討ちにされ、その手勢が八石城へ攻め登って来る気配に、家老の何某は、北条城中の重囲の中を切り抜け、城を目前に仰ぐ八まん田までたど

りついたが、時すでに遅く城は敵の手中に陥ったか、落城の火の手が上った。この惨状を目にした家老某は、城を枕に敵に一矢を報いる暇もなく、無念やわが運命これまでと、その場に自害し果て、主公のあとを追った所とされている。

そのためかこの石は無銘であつて、伝える人がなければいつかは普通の庭石として、処理されるのではなからうか。

## 久之木の塚

久之木の千本杉の下方の民有地になっているところの小杉山に昔から塚として手をつけない、周囲約10mの塚が見られる。

だれもこれには手をつけたことがないそうだから、考古学的に価値あるものかどうか、また、伝説的なものも伝わっていないので、何が埋められているかも不明である。

はっきり塚だとわかるのが二つある。しかもこのあたりを県道二和線の改良取り上げ工事で、開道されればあるいは何かが発見されるかもわからない。

## 善根の琴平

大字久之木に琴平神をまつる一小祠がある。

昔 久之木に「山」という屋号の老婆が、小使をためて、年六十  
一才のほんけがえりに、琴平宮にお参りしたいと言いだし、家人の

とめるのも聞かずに出発し、大阪についた。大阪の宿で、老婆の夢まくらに、琴平の神が現れて

「よく来てくれた。これからは私がお前をまもつてやろう」

と言われた。翌朝目ざめた老婆の懐（ふところ）の中に、琴平さんの軸がはいっていたので、老婆は力を得て、四国の琴平に参詣して村に無事帰る事が出来た。

村人はこの話を聞き、一小祠をたてて、その掛軸をおまつりしたという。

## 善根の伝五べえ

昔、善根の佐之久に伝五兵衛といつて大層豪家であつた。宅地だけでも7ha位あり、大変、敬神家でその上慈善家であつた。鯖石川が字垣田を屈曲して流れ、良田を欠壞するので村民が難儀するのを見て気の毒に思つて、神に願をかけ、能生町に行き能生権現の弊はくを受けて帰えり一社を建てて祈念した。そのご利益か川の水は西へ西へと流れ、元通りになつた。それでこの地を能生前と名づけてある。これも伝五兵衛のお陰だと村民は喜んだ。

ある時、結婚式を挙げたことがある。善根七村の人々を招待して盛宴を張つた。そこで村民は歌うに「善根伝五兵衛がかかると時は善根七村鍋かけず」と、今はその屋敷も田や畑となつてゐる。この地を稲田といつてゐるがその姓をとつて名づけたとのことだ。

## かっぱと約束

鱒石川で馬を洗って家へ帰ってふと見ると、馬のしっぽに何かぶら下がっている。ひよつと頭に浮んだのが、鱒石川の河童のこと、子どもたちが川へ水泳ぎに行っていると、肛門から手を入れて生肝（いきぎも）を引っこぬいでしまうという。悪い奴、こいつ、何を感じたのか、馬のしっぽにぶら下がりして、のこの丘へ上りおつた。どうしてくれよう、逃がしてたまるか、馬を洗う大だらいを引っくり返すが早いか、この河童をその中へ閉じ込めてしまつた。

泣き声を揚げて命を乞う河童にいささか哀れを催した主人はたらいを持ち上げて、こんこんと人の生肝を抜くことの悪業をさとし、こん後、善根川筋の子どもについては絶対に生肝を取らないことを約束すれば助けてやると言う。平身低頭、ポロポロ涙を流しながら、命さえ助けて下されば、お約束を守りますと繰り返して、鱒石川へ放された。

(注) 1. 一説に宝物として何かを出したといっているけれども、

これは他に類似の話もあり、とらない。

(注) 2. 上田尻にもこれに類似の伝説がある

(注) 3. かっぱと契約した人は 善根の佐之久の小島平べえと言われている。

## 半べえ二郎

鱒石谷では、力もちの事を半べえ二郎のようだという。

昔 字佐之久に 半べえ二郎という怪力者がいた。身のたけ六尺（一八二センチメートル）に及び 力量はならぶものがなかった。

「どれ位力があるか ためして見よう」という事になり

「酒屋のしこみ大樽をさしあげたら、酒五升に、にしんを一束進上しよう。」

と 半べえ二郎に申し出た。

半べえ二郎は、高あしだをはいて さしわたし二メートルもある大樽を 高々とさしあげたが、誤って落として 齒を二枚欠かした。それがもとで 死んでしまったという。

## 善根の子もり地蔵

善根佐之久の畑の中に、延命地蔵尊がまつられ その附近一帯は子供たちの遊び場であった。村人はこの地蔵を昔から子もり地蔵と呼んでいた。

尊い延命地蔵尊を おもちゃの様に引きずり出して遊ぶ子どもたちを見て 村松某なる老翁が もし子供たちに仏罰があつたら大変と 地蔵尊を尼堂に移した。

その夜村松老の夢まくらに 地蔵尊が現われ

「せっかく子どもと仲よく遊んでいたのに、引き離すとは何事なるか」

と叱りつけ

「明日は早々もとの場所にもどせ さもないと お前に仏罰を加える」

と言われ 夜明けを待って旧位置にもどしたという。

## 仏像と鉄牛和尚（小島家の家宝）

この家は昔は庄屋で格式の高い家であったそうだが、すぐ目の前の小山に杉森があり、そこに尼が住む堂が見える。

もとの堂はこの小島家の所有であったそうだが可成り近年になつて、部落へ移管したものらしい。

ただこの堂に安置された仏像にまつわる伝説であるが、上杉謙信が北条城を攻める前に上条城や安田城、加納城など八石城を含めた攻勢をかけ、焼討ちや、放火で住民は塗炭の苦難に遭遇し、堂も一再ならず焼けたそうである。

小島家は八石城落城、家臣離散前この土地の豪族として住んでいたらしいが、このお堂が焼失しても本尊の仏像は不思議にも、焼失の難を逃れ、だれかの手によって安泰にうつされていたとのことである。

たまたま、越後各地を巡錫中、善根浄広寺に立寄り、この仏像のことを聞き知った鉄牛和尚は、早速に参拝に見えられ、親しく仏像

を会向された上、長文の一文を一巻として残し去ったのが、小島家宝の最上のものでして保存してある。鉄牛和尚が最後に書いてある年号は、

元祿己己孟冬朔

東武葛西弘福開山嗣祖沙門

鉄牛機老僧手書

と読めるようだ。そしてこの

本尊の仏像は、いつの間にか、地蔵堂にあるのがそれだと言われているが、小島家仏壇に安置してある仏像がほんものと信じ朝夕礼拝していませんと当主は言っている。

仏像は火の中を抜けて来たので両のお手も足も欠けた立像だが、耳のところも欠け、背のわきも焼跡も黒々と、年号が刻み込んであるのも「年」という字が僅かにわかる程度、木像で丈は二十cm位か、戦国動乱の歴史の災禍に堪えた秘めたる話を聞こうようもない。

小島家はこのほかに、北条丹後守が姫君を毛利大万之介へ嫁入りさせる際、すきあらば刺せと持って持たせたという、飾刀と称する細身の小刀一振りが保存されてある。

## 乳地蔵

善根の池の平は、昔は沼であったという。

石川部落の人達が この沼の水を流して、開田しようとした時、龍が現われ、

「おれは沼の主だが 十日間その作業をのばしてくれ」  
と頼んだ、外ならぬ沼の主の願いなので、作業を十日間延期した。

その十日の中に大事件が起きた。

八石城が北条城方に滅され

たのである。奥方はこの沼に身投げされた。池の主の龍は、この奥方が身投げされる事を知っていたのであるうか。その夜投身された奥方をのせ、黒雲に乗っていずこともなく飛び去ってしまった。石川部落の人達がこの沼の水を流すと、沼の底から、奥方のうちかけが現われた。それを拾うと、うちかけに包まって、奥方の守り本尊の地藏様が現われた。

村人たちは、りっぱなお堂をたてて、お地藏様をおまつりした。

池の平の地藏様は「乳地藏様だ」といい伝えられる程、この地藏を一心にたのめば、乳がでるといわれて、信仰者がたえないという。

## 善根の道祖神

県道二和線から、八王子線へ左折してすぐ左側の道端に、道祖神が祀られてある。

若い男女が部落にあふれ夜ともなれば、部落を越えて更らに新しい相手を求め、相思相愛はもちろん、時には腕力、略奪結婚にまで発展した昔、昔の若い世代の情熱の結末にも、時には切ない命がけの恋もあった。その恋の取りもちをしてくれたのがこの道祖神、燃える切ない思いを逐げさせてくれと、ひそかに手を合せてであろうこの神様は男女二体仲よく相抱いた格好である。

最近では男女間の交際はやさしさや、気恥しさなどロマンチックなものでなくなつたせいか、恋の道祖神はいつか耳の神様となつて、耳の病気にみんな願をかけ、輪かざりが随分とこの祠の前の綱にぶ

ら下つてゐるとのことである。

(注)

この地方には数少い、双体道祖神でなからうか、このような伝説が生まれたものと思われる。

双体道祖神は信州地方に非常に多く、越後では刈羽から魚沼へかけて、北限とされている。ただし普通の双体道祖神は二体併立の姿態であるが、これは「仲よく相抱いて……」とある、現物をみなければわからないが、この表現通りとすれば珍しい。

## 石川峠の榆の木

石川峠は、いまこそ車も往きかう立派な道になつたが、昔は徒歩以外は越せない峠であつた。だから峠には石の地藏さんが道しるべとなり、旅人の心のなぐさめともなつて、立つている。

そして必ず榆(にれ)の木がある。大体、秋榆の木だがこの木が昔、善光寺参りをしたという話が伝つている。

これも道中のつれづれの旅人の創作でもあらうか。石川峠の県道は桜の木が千本も植えられ、春の花見、秋の紅葉とこれからの絶好のハイキングコースに数えられるであらう。

## 吹き切り峠の石仏

石川峠を越えきると八王子の地境となる。

ここに石仏がある。思うに道標の役をも兼ねた旅人憩いの場所でもあったらどうか。そばには一かかえの榎の木がある。昔は必ずこの榎が道程の目標としてか植えられたものとしてある。そしてその場所を起点にして一定距離に数体の地藏さまが安置してある。

この石仏は、旅人を保護するという。

柏崎の某行商人ここを通る。途中で一緒になった小千谷の商人と共に峠の頂きに来て、休み、昼寝をした。小千谷の商人が、柏崎の行商人の財布を見て、悪い心をおこして盗もうとした。その時石仏が行商人を起こした。

この事が一度ならず、二度三度に及んだので連れの商人の悪心を見抜いて、連れの旅人を欺き、いそいで出立し、山横沢の知人の家にいたり、難をまぬかれたという。

## 石川の中村家の家系図

善根七村の八石山の下にある石川部落、「仙泉荘、育齋園」という立派な庭に、格式のある構えの家が中村さんの邸である。

中村さんの家系図は随分古いもので、媒けたり、虫にくわれたり、切斷したところもあるが、とにかく桓武天皇の御子から、系統を正し記入してある。貴重な文献でもある。

中期、八石城に家老職となり、主家没落後はこの地に居を構えて、農耕で身を立てて来たものと想像される。

家系図のほかに秘伝虎の巻きと称される二巻の軸に収められた長文の秘文がある。

一卷は政治、一卷は兵法か、漢文だったり、ぼん字が入ったり、経文だったりである。

## 順 拝 塔

中村さんの先々代中村嘉兵衛という方は信仰心のあつい方で、一念発起六部となつて諸国の神社仏閣を参拝された方、

万延元庚申歳。の年

八石山麓から出る、だ円形の石に

日本神仏靈域順拝塔 と刻み、その下に御札や神符などを埋めて、建立したのが村の入口に建てられている。

## 彌三郎ばば 一

善根の久木太に彌三郎という家があった。

その家に人の好い八十才余りの老婆があったが、いつの頃からか、がらりと性格が変わり、附近の人は「鬼ばば」と言つて誰ひとり交際する者もなくなつてしまった。

老婆の悪業は日に日につつて行くのを見て彌三郎は心痛し、時々意見をしたが、きき入れなかつた。

「彌三郎ばばは、狼の頭（かしら）となり、狼をひきつれて、往來の人を殺して食つている」という評判まで立つようになった。

或日、夜おそく彌三郎が山から帰ってくる途中、狼におそわれ  
るしの木に登って難をまぬかれた。狼は

「とても我々の手におえない。頭の彌三郎ばばでも連れて来るか」  
と言って やがて一人の鬼ばばをよんで来た。彌三郎は、なたで鬼  
ばばのひたいを切りつけたので 鬼ばばも狼も逃げてしまった。  
ようやくの思いで彌三郎が帰宅すると

「風邪をひいてしまつて」

と 額に鉢巻をして 寝ていた。翌朝

「ばばさが 赤ん坊をくれている」

という妻の注進に 祖母の部屋に行つてみると 老婆は彌三郎の一  
子を食べていた。

「子供を食うやつは 親でもない子でもない」

と言って 彌三郎が老婆に切りかかった。老婆は正体を現わし 鬼  
となつて 破風よりとび出して 彌彦山に行つて 岩あなにたてこ  
もつた。彌三郎が祖母の部屋の床板をはぐると鬼にくり殺された祖  
母のきものや骨がちらばっていたという。

彌彦の妙多羅天は この彌三郎ばばを祭つたものだという。

## やさぶろうばば 二

八石山のふもと、久木太（くきぶと）に、昔、彌三郎婆（やさぶ  
るばば）という悪いばあさんがいた。その家の名は「金助」とい  
つた。

鬼婆が切られた片腕を取り上げ、家の破風窓から逃げたというの

で、それ以来久木太部落では萱屋根のグシの下にある煙出し用の破  
風窓はつくらないと言われている。

（注1）

いまは新改築が甚しいので、破風から逃げたといつても、ちょ  
つとわかるものもない位に家の模様も変つた。

（注2）

金助の家には、この伝説にまつわる刀や秘仏（ひぶつ）があつ  
たと伝えられていたが、今では家も改築され、遺品も散失して  
わずかに仏様の巻物が残っているだけであるという。

## 浄広寺の青傘

久木太の彌三郎の自宅から逃げ出した彌三郎婆は本来の鬼婆とな  
つて八石山の岩屋に住んで、赤い日傘（かさ）一長柄一に赤の衣を  
みると、さてさて有難い葬式やとひとりごとを言いながら棺をかき  
さらつて、中の死人を奪つては喰つた。飛岡の浄広寺の和尚が一計  
を案じ、ために青の日傘に青の衣に改めたら、二度と棺を奪われ  
ることがないようになつた。それで今でも他の寺では赤の日傘を用  
いるのにこの寺ばかりは青の日傘を使うことになっている。

この鬼婆は後、彌彦の方に飛んで行つたということである。

## なたの池

久木太の小城のあつた下の方に、八石城主が殺され、敵兵が攻め

て来たときに、奥方が陣頭に立って防戦されたが敵せず逃れて、この池にたどりついて、なぎなたを投げ捨て、自害されたところから、なたの池の名があるそうだ。

## 清滝寺の宝物

加納の小黒山清滝寺という寺に宝物として兵書六巻と錫杖の二品がある。

これは昔、源義経が追われて奥州に逃げる途中、小田山新田を通り加納に至り清滝寺に泊り、そのお礼として賜ったものといわれ、兵書は義経公より錫杖は弁慶より与えられたものという。

これを見ると目がつぶれるといって世間の人には見せないという。

## 加納の薬師堂

加納清滝寺の後山に薬師如来をまつた薬師堂がある。大変景勝の地であるが、この薬師如来はもと佐之久の人里離れた所にあつて参拝人もまれでなかった。ある夜佐之久の中村という老婆の夢の中にたつて、

「ここにいつまでいても大ぜいの人を救うことはできないので人通りの多い所にうつしてくれ」

というお告げがあり、同時に清滝寺の住職の夢の中にも現われて、「わしをこの寺の後山にまつてくれ、大ぜいの人を助けるには

一番適した土地である」というお告げがあり、不思議さに一同は感激して現今の位置に移したという。

## 出戸の弘法井

昭和三十年ころ耕地整理の時、すっかりなくなりましたが、出戸の弘法井といえは、このあたり切つての良質の水が湧き出ている井で、あたりの人はみなこれを利用していたものだ。

伝えるところによると、弘法さまが諸国行脚の折、ここを通られた時、とてもどろろがかわいたが、あたりにはそれらしいところもない野っ原だったので、持っていた杖で大地を突き掘ると不思議や清水がふき出たというのである。

(注) 上加納の長谷川作郎さんの寄せられた文によれば、

私の元の屋敷にあった井戸ですが祖父の申し伝えには、先祖が飲み水に困っていた時弘法大師が巡回の折、その場所を示し井戸を掘らせたら、清涼な水が湧き出たのだとのこと。

幼稚な字で書いた弘法大師の石碑があります……ともある。一説には、弘法大師がこの地に巡錫された時、一婦人が川の水で米をといでいたので、

「わしが水を進ぜよう」

と 錫杖を大地につきさすと、こんこんと清水が湧いた。

「この水で飯米をとげ、飲み水にもせよ」と言われて立ち去られた。

## 豺(さい)の神——家号

上加納に屋号「豺の神」(さいのかみ)という面白い名の家があります。

付近の老人たちは、昔新年の松飾りなどを旧正月十五日にこれを取りはずしたのをまとめて燃やすのを「さいの神焼き」と称し、この家の付近の空地でやったから、この家号があるのだらうと話している。

家はすっかり新改築してあり、その本家の老人の話によると、豺の神家は分家後何代もたたず、あととりがなく絶えてしまつて、現在の当主は別の者だといつていた。

不疑(ぶしつけ)に家号についての伝説などはと、当主に聞いたら別に話すようなことはない、と答えられた。

ただ当主のいうには、家号は「賽の神」ですと断つていた。

豺の神の屋号については、次のような話が残っている。

昔 この家の主人 未明に起きて 田を耕そうと思ひ 馬をひき出し くつわをかけ、すきをかけて 田土をかきおこした。一反歩(十アール)ばかり耕した時 やつと東天が白みかかった。

よく見れば 馬だと思つたのは 馬でなく、馬屋にしのびこんだ豺であつた。主人はびっくりしたが 頓才の豊かな主人は いろいろと豺をほめ 人に見つからぬ中にと 耕具をはずしてやると 豺は後をも見ずに 八石山に一散に逃げて行つたと。

この話が伝わり その後この家を 豺の神とあだなするようになった

たという。

## 柏戸関と加藤家の墓

上加納の加藤小十郎どんといえは加納きつての豪農だつた。

先代が非常に相撲好きの方で、江戸相撲の大場所がはねると地方巡業のない間、あるいは次の大相撲が始まる前まで、大勢の力士たちを自分の邸内で遊ばせていたというのだ。ただ漫然と滞留させたわけではなく、力士の技量の向上や新弟子開発にも力を入れたのだ。伊勢の浜部屋の上位の相撲さんは代々柏戸を名乗つたそうであるが、小国町の岩田から出た七代目、中鯖石善根から出た八代目は、今の鏡山柏戸に続いているそうで、加藤家では他の有志とはかつて、七代目、八代目にどんすを贈つたとのこと。

そのため小十郎どんが死去してから厚遇を受けた力士たちが、石碑(墓)を建立し、めぐりには二十名余りの力士の名が刻んである。十数年にもなるか、今の柏戸横綱が地方巡業で柏崎市へ来たとき、特に立ち寄り参拝したので、当時の新聞をにぎわした。

加藤さんは相撲に打ち込み、株で財産を棒にし、現在はいない。盛んだつたころの話に、貧乏百姓連中は、小十郎どんちで相撲が始まつた。ひとつ酒をごちそうになりに行こうぜ、と大盤振舞のごたごたのなかで、あれこれ手伝いながら、力士の滞在中は酒と肴に不自由しなかつたと笑い話になっている。

## 沢田沖の石仏

加納の与板寄りの地帯に、沢田という名称の場所がある。

国道二五二号線から少し入って用水路に沿った奥に、石仏という家号の家がある。その近く お地藏様がお堂に祀られてあり、そこに乳の出ない若いおかあさん方が、祈願したといわれている。

一説に この沢田はちくたれ（低湿地）なので 清滝寺の境内に移そうとした事がある。その時 加納の金子某の老婆の夢まぐらに現われ

「わしはこの土地が気に入っている。もしわしを移せば流行病で人が死ぬぞ。ちくたれで悪いと思つたら きれいにせよ」と 言われたというので 移転はとりやめたという。

## 長者堀と朱がめ

小黒の沢を行くと長者が住んでいたという長者堀がある。これはから堀だというが、とに角相当の長者だと伝えられている。

そのあとかどうか塚があり、その上にはかなりの松の木が生えている。

その長者にまつわる話として、飼い馬が どこかの朱がめをふんで来て、脚を真赤にしていた。がその朱がめはいまだに見つけられないと伝えられている。

## 小黒沢の地名

「寺屋敷」「井戸前」「トリの坊」「シニウ坊」「沖ノ坊」、その他寺が中心にあったものか、それにちなんだ地名が多い。

また道も鳥越から、苧が峯（とびがみね）を経て、紫雲谷へ下る順序に名がつけられてある。

## 周広院開基

この寺の開基（ひらいた人）は八石城主であった毛利大万允周広である。北条普広寺五世春道禪師に帰依（きえ）し、授戒（じゆかい）した。そのころ、春道禪師は廃寺（はいじ）の復興に努力し、この地に泉福山周広院を建立した。南方の谷に昔から、かれないよい泉があったので山号とした。

二世通山從徹大和尚の時——天正のころ——火事で焼けてしまった。小庵をつくって、ようやく雨露をしのいでいた。

四世嶽山航海大和尚の時——寛永二乙酉——願をおこし、長岡の牧野侯の援助によって寺が再興された。

## 八石城下屋敷

与板の周広院の裏手に「六丁平」「十二平」とか「女郎買いの沢」

などという名で呼ばれている畑になっている平地がある。

伝えるところによると、八石山上の冬は雪がとて深くて、越冬資材その他いろいろの事情緩和のため、ここに屋敷をつくって冬期間の生活の場としていたらしい。

「女郎買いの沢」なども、若い武士連の豪雪の長い冬のたいくつを過すために置かれたものといわれている。

また、漆山の小学校地一帯の平地は馬場あとだと伝えられている。

(注) 漆山とは現在の鯖石小学校のあたり一帯のこと。

## 十二平の馬

与板の十二平は墓場になっているが天文のころは毛利周広公のお城があった所であるという。

周広公が没落の時にたくさんの朱を埋めておかれたという話があるがどこに埋めてあるのか知る人もないまま年を経た。

ある年一頭の馬がどこから駆けてきたものか、駆けてきて十二平を走りまわった。見るとどこで朱かめをふんできたものか足にべつたり朱がついていた。

村人たちが総出で馬をとりおさえようとしたが馬はかけ出してつかまらず、どこかへ逃げて行ってしまった。

村民が集まって十二平のすみからすみまで探したが朱かめはとうとう見つからなかったということである。

## はげ熊の話

中鯖石村与板に はげ熊という男があった。

米山さんの本尊を盗みだして 他国で開帳して歩き ひともうけしようと思った。

百姓仕事も終えたので 冬 米山に登ったが本尊は ふもとの米山寺(べいさんじ)に下りて 山頂の堂内にはなかった。堂内には御幣があっただけであつたが、その御幣を盗み出して山を下り

「米山の神体を見せる」

と言って 佐渡へ持っていく 御開帳しながら 町町、村村をあるいたという。

## 与板の稻荷

いつ、どなたが勧請(かんじょう)したかわからない。

もと寺院境内に祠堂があつて、祀つてあつたものだが、最近はその堂内に安置してある。

特別な伝説は伝わっていない。

これについては こんな伝説がある。

与板の原に狐がいた。いたずら狐で 原を通る通行人をだましては

魚や油げを奪っていた。通行人は困ったが、年を経て神通力をもった狐なので、どうする事もできず、周広院の住職に相談した。住職は「狐を呼んで

「衆人がお前のため困っているが、神様にまつてやるから、いたずらをやめないか」と言った。狐は神様にまつてもらえるなら、いたずらをやめましよう」と誓った。

周広院の北の山にある稲荷堂は、こうして出来たものといわれている。

## あまがひたいの

### 六地藏とやしが沢

与板部落から上条芋川、久米方面へはいろいろの道路がある。久米の方は尼がひたいの頂上を越して行くのが普通である。

この頂上には「一の地藏さん」「二の地藏さん」と数えて六つの地藏さんが並んでいる。これはもと久米の人が夫婦の間に子どものないのを切なく思って、子宝を授けてもらうため信心に建立したものだといわれているが、どこにもあるように山の境界争いの大事な証拠物であった。というのは山の年貢を納めることが容易でないとしたこの部落でも、自分たちの領地をなるべく、せまくしようと努めたものらしい、ここでもご他聞にもれず、与板と久米の両方で地藏さんの奪い合いをしたそうであるが、与板側に腕っ節の強いのがいて、無理矢理に持って行かれ、与板の人たちは年貢が安くてす

むわいと大喜びしたもんだとのことである。

芋川へ行く通称「通り沢」に、途中「やしが沢」と呼ばれているところがある。昔、懐中にたくさん、もうけた金を持った香具師

(やし)が、どこからつけねらわれて来たものか、この人家のとだえた場所、惨殺され所持金を奪われたという。

名も知れない行きずりの香具師でも殺人が行なわれることなど滅多になかったこととて、小さい石地藏が建てられ、めい福を弔うてある。

## 尼が額の狼

三ツ子沢から与板に通ずる峠を「はなたて」といい、そこに一本の大きな松の木があった。

向う村の紺屋どんという、ちぢみ屋がこの村で商売していた。ある日遅くなって峠に来ると狼が群をなしてとびかかろうとした。そこで急いで木に登ったら、狼は木を倒そうと思ひ根を掘りはじめた。

こんやどんは「いよいよ峠で命がなくなる」と思い、自分の村の鎮守様を拜んでいたら、あかりが見えて来た。

そこで「どうか木が倒れないよう助けて下さい。もし助けて下されば、こうすい祭をしてお礼をします。」というので、どうでしょう夜中というのに鶏が時をつけました。狼は朝が来たと思つて群をなして引きかえし、紺屋どんは九死に一生を得た。そこで村に帰り、村人にたのんで、こうすい祭をもらった。今でも与板では八月

十四日の夜に行われているという。

## 狼にやられた仙治郎

与板の仙治郎が魚沼の妻有（つまあり）村へ用事を頼まれて出かけた。ところが幾日たっても帰って来ないし、消息不明である。

ある日同じ村の某が、天がひたいの畑へ行くと狼のくそがあつたので、これは変つたことがなければよいがと、心配しながら、そのくそを調べると、衣類らしい物が混つていたので、小川へ行って洗つて見ると、着物のきれぎれになつた部分が出てきた。なおもよくよく調べたら、つまり用達に行つた仙治郎が着ていた着物の模様そっくりである。さては仙治郎は用達の帰り、あまがひたいの山道で、狼に喰われてしまったのか、可愛そうなことをしたと村の人々は改めて仙治郎を葬つたと伝えられている。

（注）妻有と天がひたい（尼がひたい？）と与板の方向関係が全くあべこべである点、つじつまが合わない気がする。

## 宮平部落のいわれ

宮平の部落は往時宮平と久木太郎の中間にある畑地に散在していたそうである。この土地は風通しもよく、地味肥えているので作

物の出来が良いので、このような土地を宅地にして置くのは不経済のことであると、西寄りの山ぎわに転居したのだと伝えられている。そのため村の鎮守様（黒姫神社）の社殿は今でも部落に背を向けて東に向つて建ててある。また現在の国道沿いにある石坂の参道は実は裏参道であるが部落の大部分の人は、この石段から登つて神殿に参詣する。

いままでの火葬場の所在地、俗称城後（じょうのち）といつておりますが、この地には昔、城があつたのだと聞いている。この近くには、石器や石斧等古代のものが時々発掘される。

## 石川の観世音

善根の石川という所で、ある時火事があつて火はたちまち四五軒を焼き、更に観音堂を包んでしまった。中川某という老人、猛火をおかし、観音像を救い出して自宅に運んできた。観音堂を焼いた火勢はいよいよはげしく、中川某の居宅も又危険になつたので、家中大さわぎして家財道具を運び出そうとした時、見なれない白髪の老翁があらわれて

「この家は焼ける事はないから、荷物を片づける必要はない」と言つて、その姿は見えなくなつた。

中川某はふしぎな思いをしたが、そのいでたちが常人とちがつていたのに気がつき

「これは観音様のお告げにちがいない」

と 荷物を運び出すのをやめさせた。果して火は隣家を焼いて止ま  
ってしまったという。

